

第2節 勉強の悩みと意味

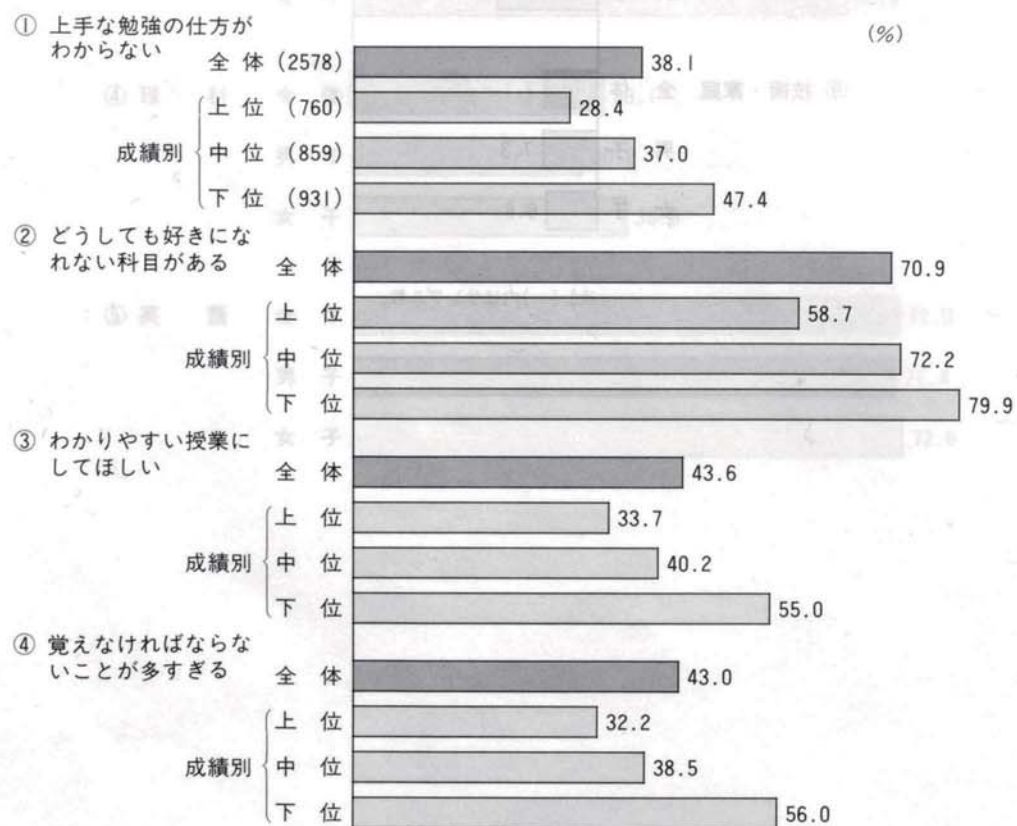
1. 学習の悩み

子どもたちは、学習をめぐるさまざまな悩みを抱えている。まず、小学生の悩みの実態に検討を加えてみる(図2-14)。9つの項目のうち一番悩みが多かったのは、「もっと成績をよくしたい」(81.3%)で、8割を超える児童が成績向上を願っていることがわかる。「問題が解けたり、何かがわかるとうれしい」という回答も80.1%に達した。また、「どうしても好きになれない科目がある」(70.9%)、「勉強で友だちに負けたくない」(60.0%)と

いう意識をもっている者もかなりの割合を占めている。逆に、「何のために勉強しているのかわからない」という根本的な悩みは小学生ではかなり少ない。これを成績別にみると、ほとんどの項目で成績下位者ほど多くの悩みを抱えていることがわかる。

中学生については、一部分小学生と重なる14の項目を設定して回答を求めた。図2-15によると、最も多い悩みは「上手な勉強の仕方がわからない」で約7割に及んだ(70.2

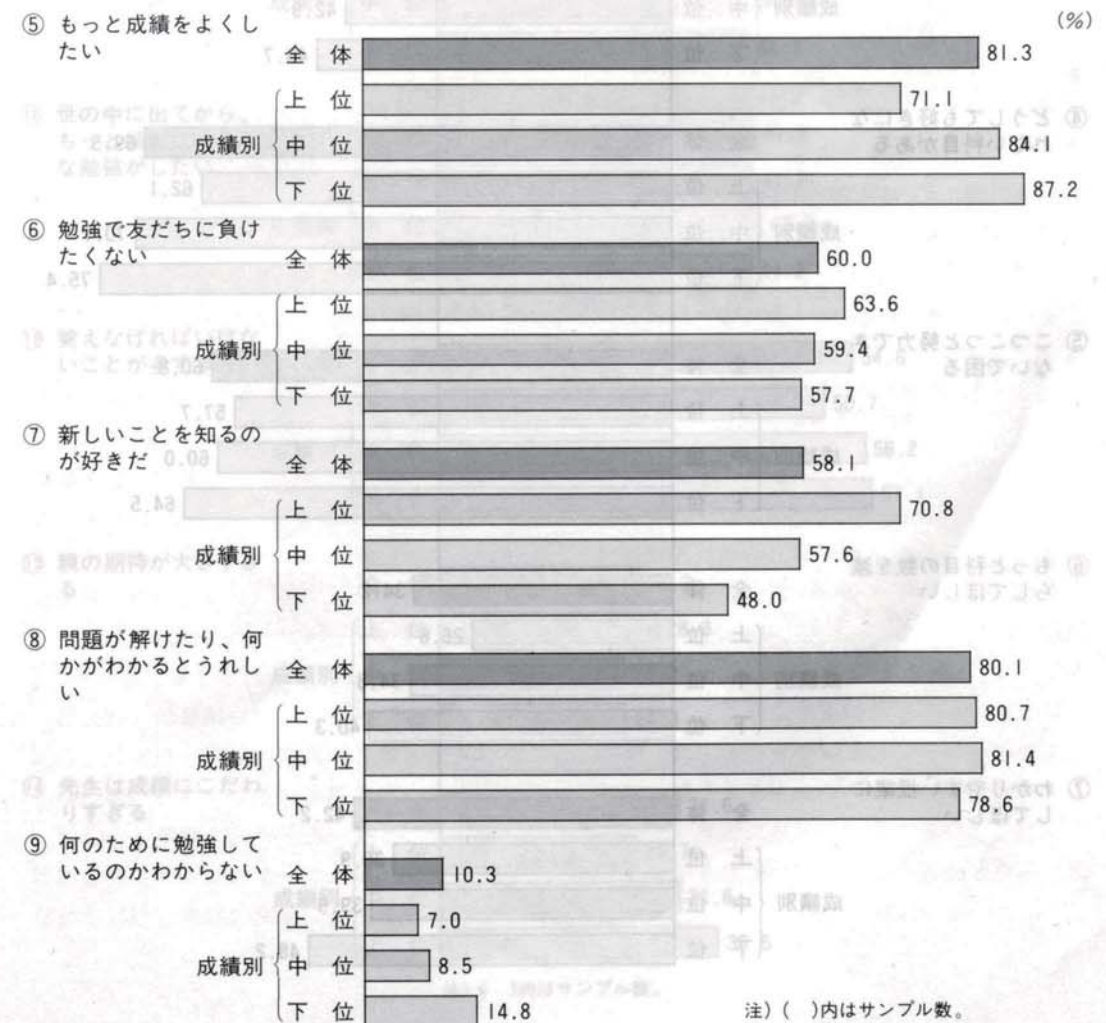
図2-14 成績別に見た学習の悩み(小学生)



%)。以下、「どうしても好きになれない科目がある」(69.5%)、「こつこつと努力できないで困る」(60.8%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(54.6%)と続いている。また、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」(45.9%)、「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」(41.8%)といった不満を感じ始めるのもこの頃である。なかでも、「上手な勉強の仕方がわからない」という悩みを抱える生徒が小学生の2倍に上っている点が注目される。勉強のテクニックはよい成績をとるための大切な条件と考えられているがゆえに、不満もひときわ増幅されるのであろう。もちろん、こういった悩みはとくに成績下位者で深刻に捉えられている。なかでも、「自分は生

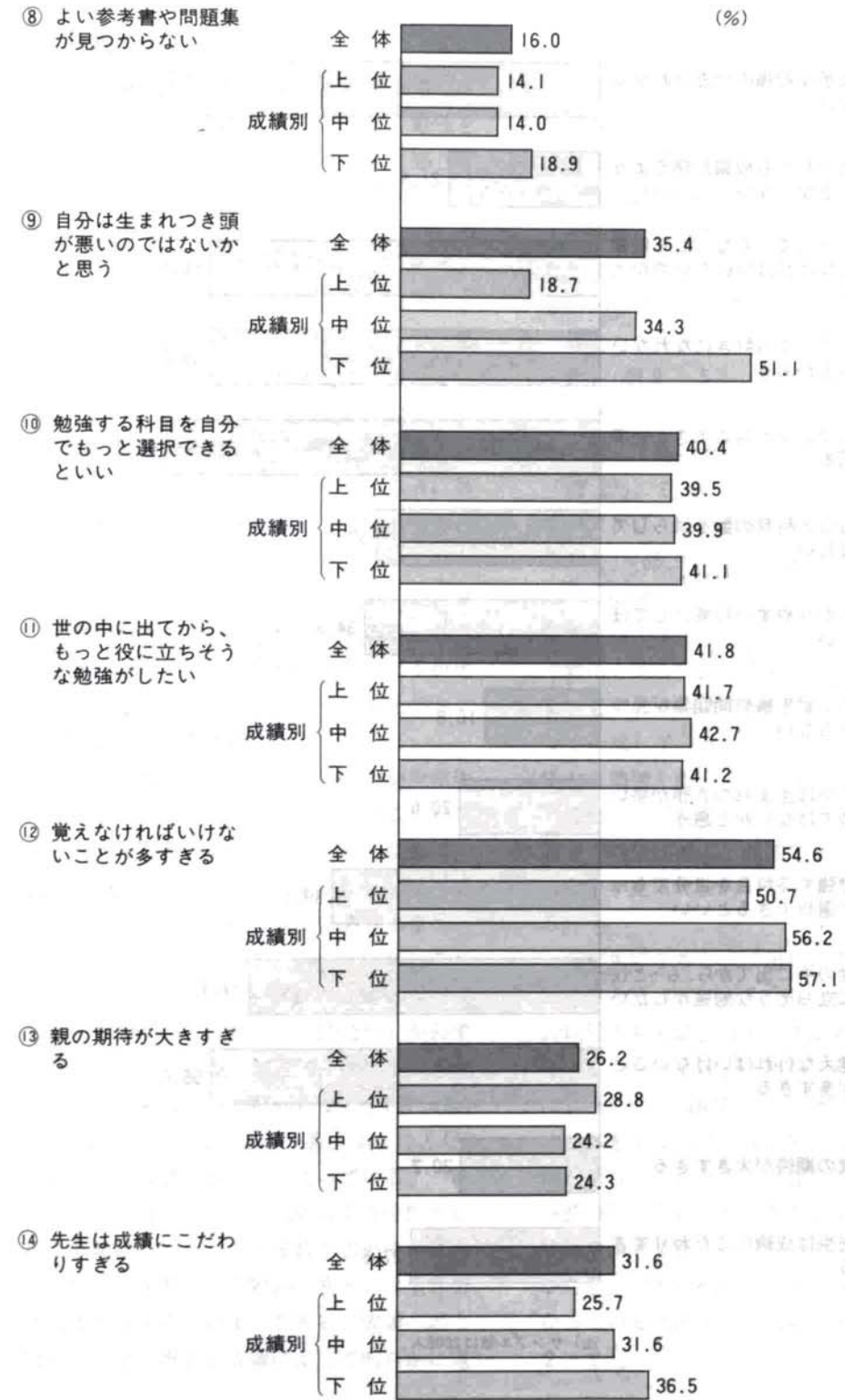
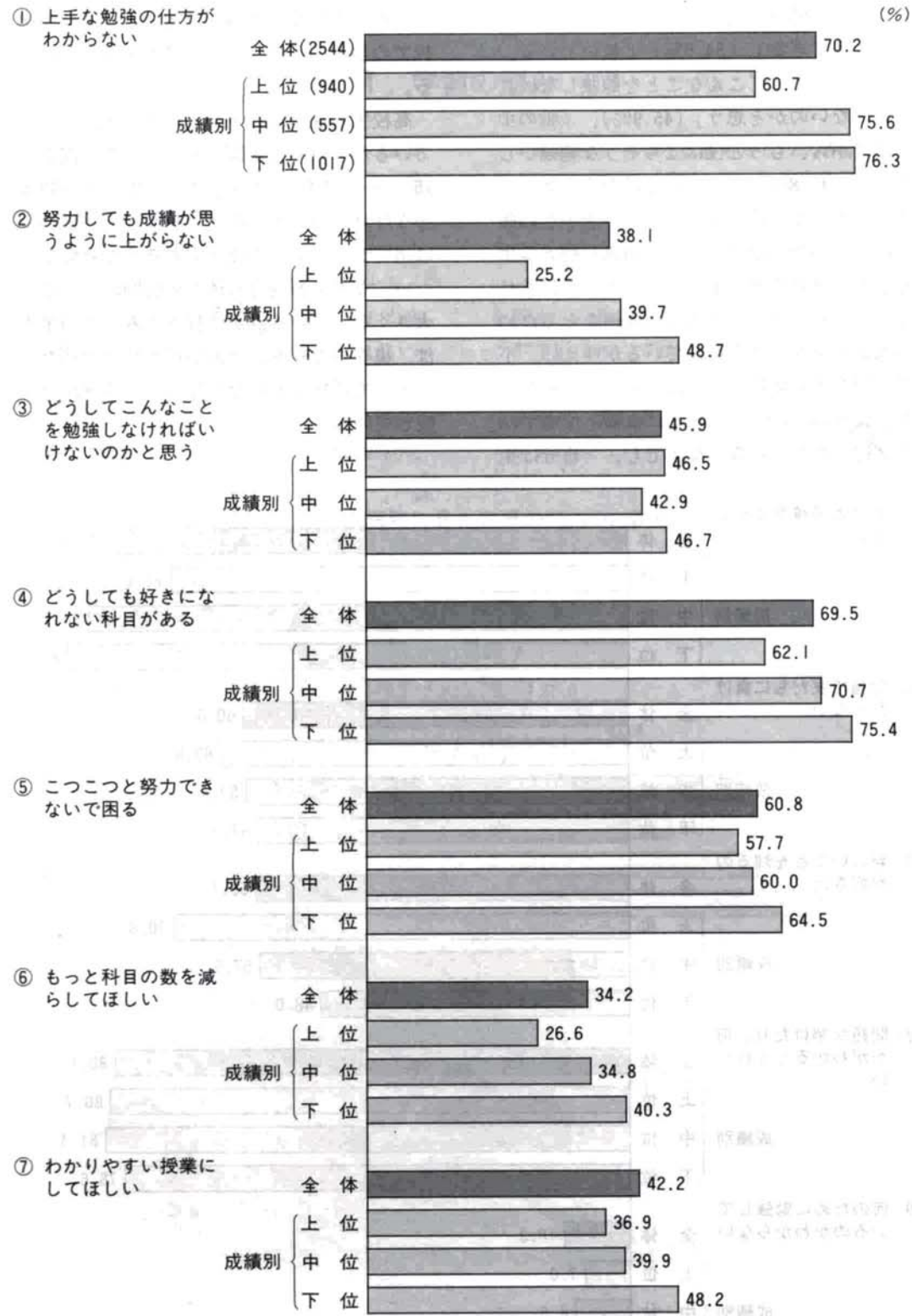
まれつき頭が悪いのではないかと思う」という生徒は、成績が下位の場合、過半数を数えているのである。成績下位者にとって、中学校での学習の負担は思いのほか大きいといえる。

高校生の悩みは、中学生の場合とかなり似ているが、いくつか違いもみられる(図2-16)。なかでも、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」と「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」など学習内容自体への疑問がますます大きくなっている点が注目される。この事実は、現在のカリキュラムが相当数の生徒たちにとって意味をもたなくなっている状況を示唆している。



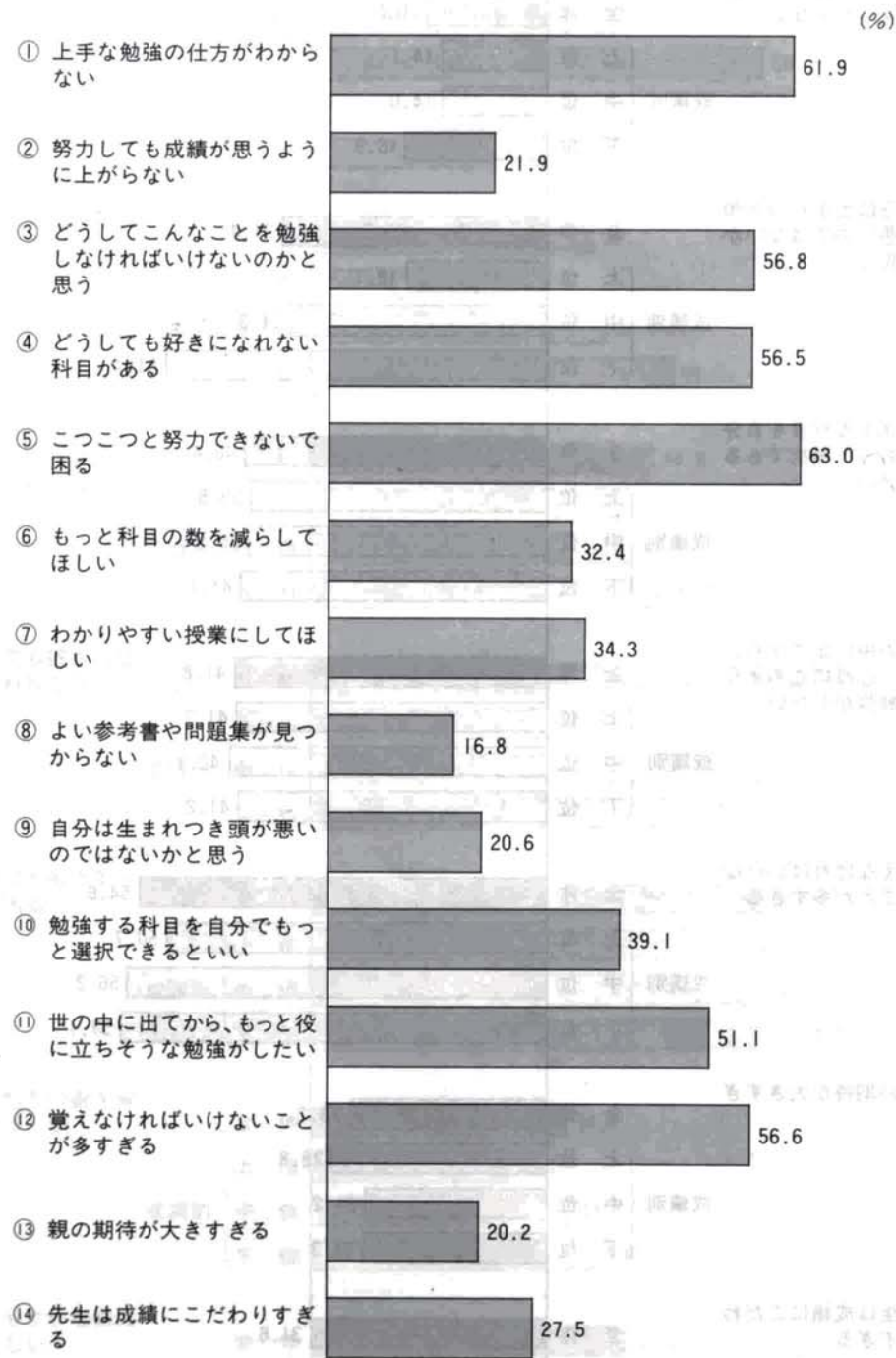
注) ()内はサンプル数。

図2-15 成績別に見た学習の悩み(中学生)



注) ()内はサンプル数。

図2-16 学習の悩み(高校生)



注) サンプル数は2005人。

2. 勉強の意義——中学生の場合——

(1) 勉強の喜び

勉強の意義について、とくに中学生にしほってたずねてみた(図2-17)。まず、勉強をしていてどんなときに「うれしい」と感じるかを調べたところ、次のような結果が得られた(「とてもうれしい」と「まあうれしい」の合計)。最も喜びを感じるのは、「テストの点数が上がったとき」で全体の94.6%が肯定している。これに、「難しそうな問題が自分で解けたとき」(84.8%)、「仲のよい友だちよりテストの点数が上がったとき」(75.4%)が続いている。テストの点数の高低が勉強の喜びと強く結びついている点に特徴がある。また、大まかにいって、女子のほうが全体的に多くの場面で喜びを感じており、しかも、先生や両親からほめられることに喜びを感じる度合いが大きいようである。さらに、どちらかといえば成績上位者のほうが比較的喜びを感じやすいこともつけ加えておく。

(2) 成績へのこだわり

成績や点数へのこだわりが強いのが中学生の特徴であるが、今度は、成績へのこだわり方を眺めてみる。5つの選択肢への反応は、図2-18の通りである。最も多かったのは、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」で62.6%に達した。これに「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(59.3%)がわずかな差で続いている。他方、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(27.8%)と「いまは勉強することが一番大切なことだ」(29.8%)は2割台にとどまっている。一般的に、ほどほどの学力を求める者と受験のために成績にこだわる者が多数を占めているのに対して、享楽志向や勉強一筋という生き方はあまりはやらないようである。成績へのこだわり方は、現在の成績によって明らかに違

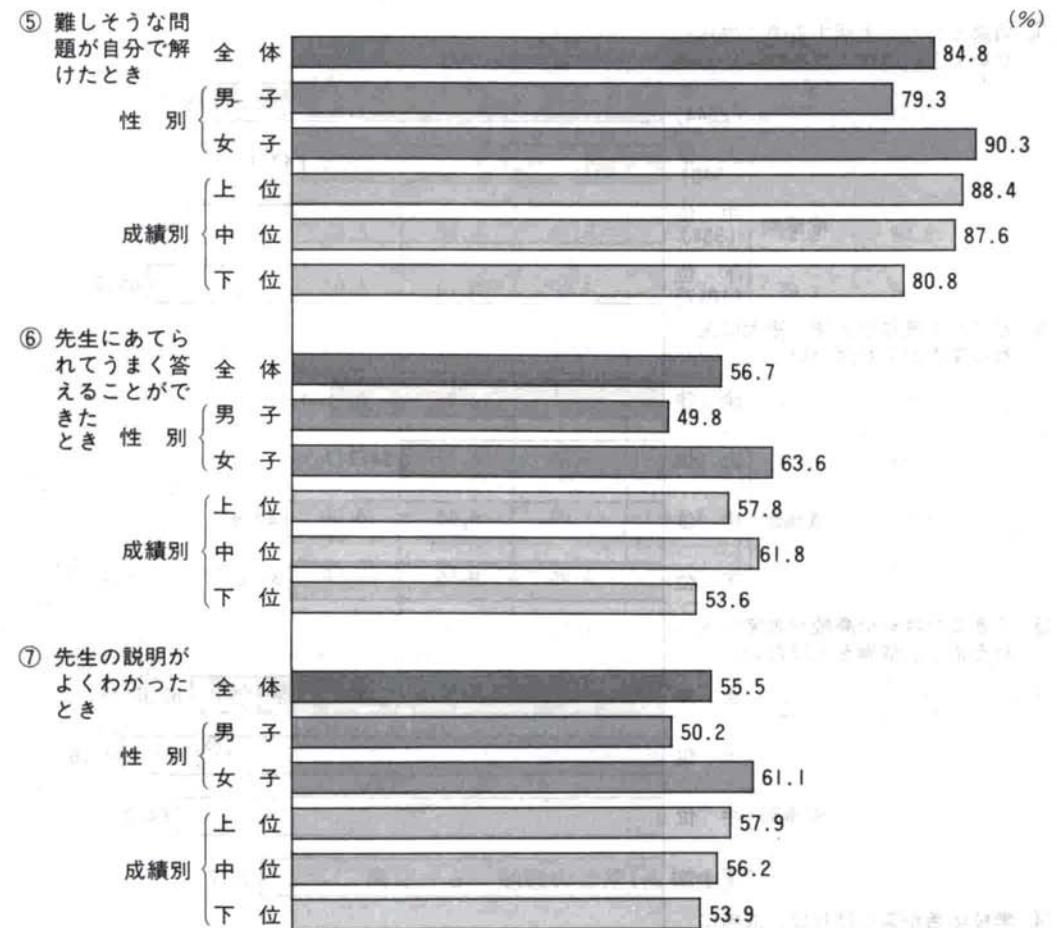
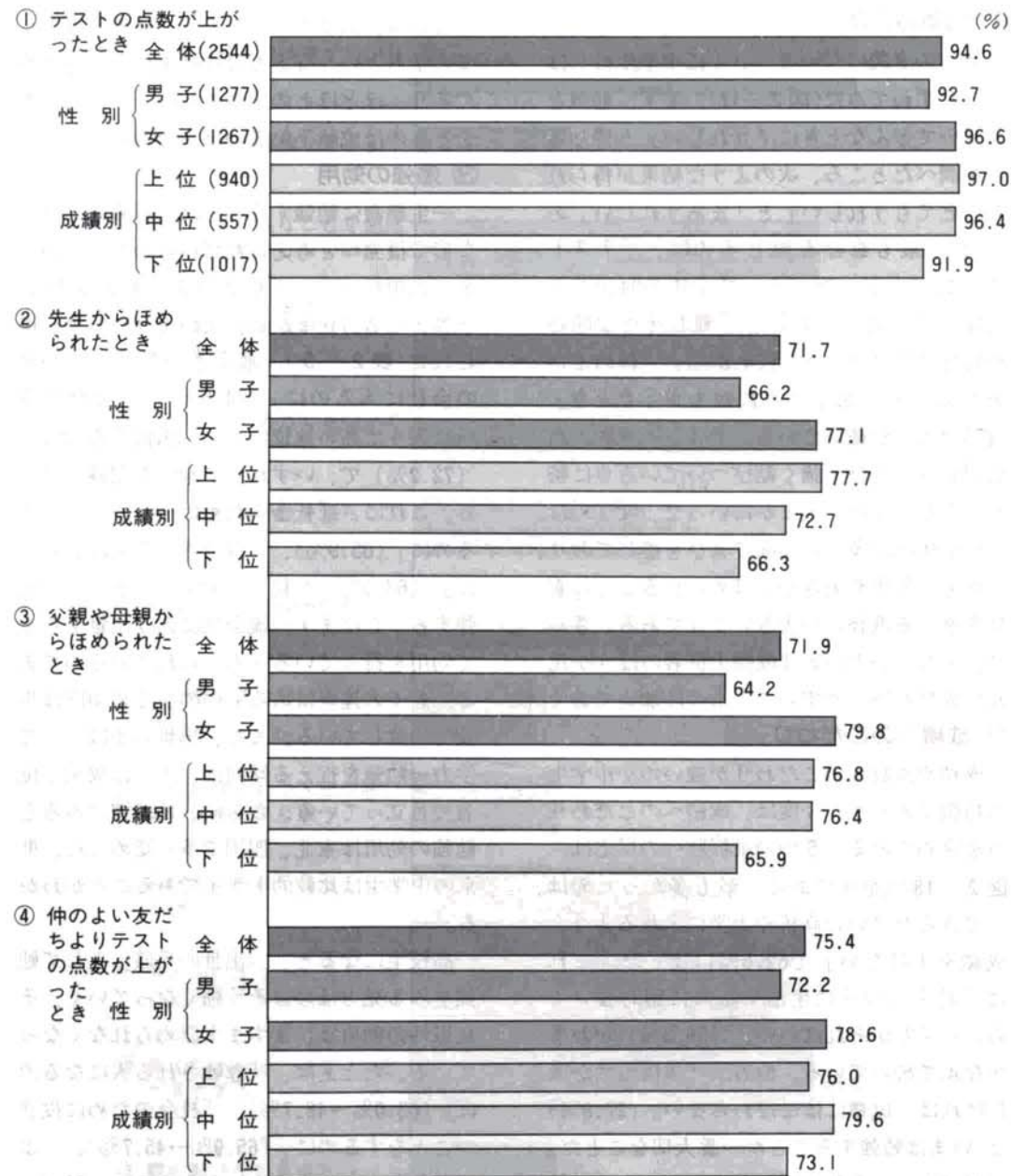
っている。大まかにいって、受験の手段としての学力という捉え方は成績上位者に特徴的であり、ほどほどの学力でいいという考え方をとるのは成績下位者のほうである。

(3) 勉強の効用

一生懸命に勉強することは、将来どのような形で役立つと考えられているのだろうか。8つの項目に「とても役立つ」「まあ役立つ」と答えた者の比率から、次のような結果が得られた(表2-5)。最も多いのは、「一流の会社に入るのに」(74.6%)、「会社や役所に入って高い地位につく(出世する)のに」(72.2%)で、いずれも7割台を記録している。これに、「社会のために役立つことをするのに」(65.9%)、「尊敬される人になるのに」(63.0%)が続く。中学生にとって、勉強することはまず一流会社に入り出世する上で効用を持っていると考えられているのである。若干の違いはあるものの、この傾向は男女で一致している。また、出世の手段として学力・勉強を捉える傾向は、とくに成績上位者で目立っている。さらに、地域別にみると勉強の効用は東北、四国で多く認められ、東京の中学生は比較的ドライであることがわかる。

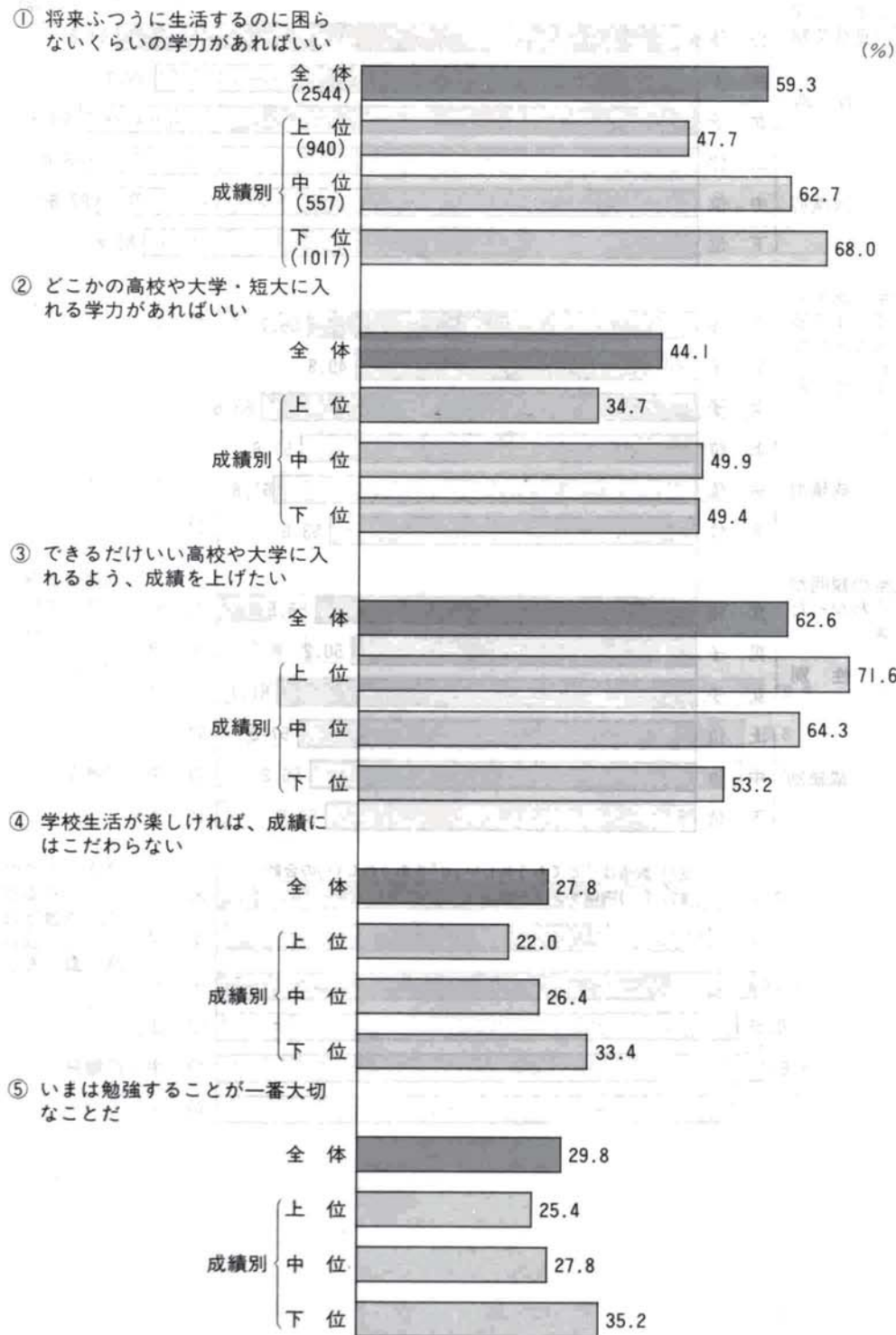
高校生になると、「出世の手段」として勉強をみる見方はいっそう強くなっていく。それ以外の効用は、ますます認められなくなっている。たとえば、「尊敬される人になるのに」(63.0%→48.7%)、「社会のために役立つことをするのに」(65.9%→45.7%)、「よいお父さん、お母さんになるのに」(53.8%→35.2%)といった効用を肯定する生徒は、20%前後も少なくなっているのである。ここからも、学習に純粋な意味を見いださなくなっている状況を読み取ることができる(表2-6)。

図2-17 成績別に見た勉強の喜び(中学生)



注1) 数値は「とてもうれしい」と「まあうれしい」の合計。
注2) ()内はサンプル数。

図2-18 成績別に見た成績へのこだわり(中学生)



注) ()内はサンプル数。

表2-5 男女別、成績別、地域別に見た勉強の効用(中学生)

	①一流の会社に入るのに	②お金持ちになって豊かな生活をするのに	③精神的に豊かな生活をするのに	④趣味やスポーツなど、楽しく生活するために	⑤尊敬される人になるのに	⑥会社や役所に入って高い地位につく(出世する)のに	⑦よいお父さん、お母さんになるのに	⑧社会のために役立つことをするのに	
全体 (2544)	74.6	42.9	57.3	47.0	63.0	72.2	53.8	65.9	
男子 (1277)	74.2	50.8	61.0	50.9	59.3	70.1	54.4	64.3	
女子 (1267)	75.1	35.0	53.7	43.1	66.7	74.2	53.1	67.7	
成績別	上位 (940)	81.6	45.5	58.3	48.0	68.3	78.4	53.3	67.8
	中位 (557)	74.1	43.3	61.5	48.7	65.0	74.5	56.8	70.2
	下位 (1017)	68.8	40.6	54.8	45.7	57.8	65.8	53.3	62.8
地域	東京 (842)	68.3	39.2	53.6	50.3	59.8	65.0	50.3	60.7
	東北 (859)	77.1	41.8	59.2	44.4	66.2	76.0	57.0	71.8
	四国 (843)	78.4	47.8	58.9	46.5	63.1	75.6	53.9	65.3

注1) 数値は「とても役立つ」と「まあ役立つ」の合計。
注2) ()内はサンプル数。

表2-6 勉強の効用(高校生)

	①一流の会社に入るのに	②お金持ちになって豊かな生活をするのに	③精神的に豊かな生活をするのに	④趣味やスポーツなど、楽しく生活するために	⑤尊敬される人になるのに	⑥会社や役所に入って高い地位につく(出世する)のに	⑦よいお父さん、お母さんになるのに	⑧社会のために役立つことをするのに
全体 (2005)	77.1	45.8	51.5	37.6	48.7	73.2	35.2	45.7

注1) 数値は「とても役立つ」と「まあ役立つ」の合計。
注2) ()内はサンプル数。

